Osaka University Knowledge Archive

Title	『說文解字繫傳』「類聚篇」考
Author(s)	坂内, 千里
Citation	言語文化研究. 2020, 46, p. 7-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75489
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『說文解字繫傳』「類聚篇」考

坂　内　千　里

On *Lei-ju pian* of the *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*

SAKAUCHI Chisato

The *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan* (i.e. Xiao-Xu-ben), written by Xu Kai in the Southern Tang era, consists of two portions. The first 30 volumes contain his annotation upon the *Shuo-wen jie-zi* which is the oldest existing dictionary, and are named *Tong-shi pian*. In the latter 10 volumes, Xu Kai's original argument is developed.

This paper examines the features of the description of *Lei-ju pian* which is included in the latter portion.

キーワード：徐鍇，『說文解字繫傳』，「類聚篇」

一　はじめに

南唐 徐鍇（921–975：以下，小徐と称する）の著した『說文解字繫傳』は，現存する最古の字書である『說文解字』の全体を通して注釈を施した最初の著作である。『說文解字繫傳』（以下，小徐本と称する）は，『說文解字』（以下，『說文』と称する）の許慎の解説である説解に対して注釈を施した「通釋篇」30巻に，「部敍篇」2巻などの論10巻を合わせた全40巻から成る。

この論10巻に含まれる「類聚篇」は，同類のものをまとめて挙げ，その文字の象ったものを説明するものとされる[1)]。本稿では，この「類聚篇」について，どのような文字が取り上げられているのか，また「通釋篇」とはどのような関係にあるのかなど，その記述の目的・特徴について考察する。

なお，本稿では，最も善本と称せられる道光十九年（1839）寿陽祁氏（嶲藻）拠景宋鈔本重刊

1）周祖謨『問學集』（北京 中華書局 1981年 第二次印刷版 総930頁）「徐鍇的說文學」に論10巻の性質について簡単にまとめた部分がある。原文は以下の通り。「通釋部分是解釋許氏原書的說解的，部敍是推陳說文五百四十部排列次序的意義的，通論是發揮文字結體的含義的，祛妄是駁斥前人說字的謬見的，類聚是擧出同類名物的字說明它們的取象的，錯綜是從人事推闡古人造字的意恉的，疑義是論列說文所闕之字及字體與小篆不合的。至於系述，則猶如史記的自序、漢書的敍傳一樣，是說明各篇著述的旨趣的。」（pp.843–844）

本の影印である中華書局本（1987年：以下，祁刻本と称する）を底本として使用する。但し，「類聚篇」については，四部叢刊所収の景古里瞿氏鉄琴銅楼蔵宋刊本[2)]が善本とされるため，この瞿氏旧蔵本をも参照し，「四部叢刊本」と称する。また，「通釋篇」を引用する際には，特に必要がない限り，反切を省略する。引用に際しては，兄徐鉉等の校訂本（以下，大徐本と称する），及び段玉裁『說文解字注』（以下，段注と称する）を適宜参照する。大徐本は同治十二年（1873）陳昌治改刻一篆一行本（中華書局　1983年第7次印刷版），段注は経韻楼本（台湾芸文印書館　1979年第5版）を使用する。そのほか，『易』・『爾雅』など十三経については，阮元十三経注疏本（台湾芸文印書館　1981年第8版）を使用する。

また，本文中の数字は，原則として序数は漢数字で，数値は算用数字で表記する。また，書名・篇名及び（訓読を含む）引用文には原則として旧字体を用いるが，使用フォントの制限により旧字体になっていないものもある。

二　「類聚篇」の概要

まず小徐が，各篇の著述の趣旨を記した「系述篇」を見ておこう。「類聚篇」について，「稟受有義、朋友有群、譬諸草木、區別是分、萬類紛糅、不相奪倫[3)]、作類聚第三十七（稟受に義有り、朋友に群有り、諸を草木に譬うるに、區別是れ分れ、萬類紛糅（ふんじゅう）するも、倫を相い奪わず、類聚第三十七を作る）」（巻四十）と述べている。ごく短い簡単なものであるので，具体的な記述はなく，天性の同じものが集まり類をなし，入り乱れつつも，お互いその類を侵すことはないと言うのみである。

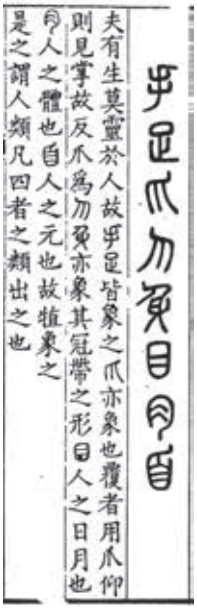
それでは，記述内容を検討する前に，祁刻本と四部叢刊本の異同について見ておこう。

まず最初に目につくのは，その形式の違いである。祁刻本（「図1」参照）は，まず取り上げる文字を見出のように小篆で大書した後，双行で各類について記述していく。また，取り上げられた文字は，双行の論述の中でも，基本的に小篆で表記される。それに対して四部叢刊本（「図2」参照）は，まず見出文字を小篆で大書する点は同じであるが，双行の論述の中で，一部の文字が小篆で大書されている以外は，全て楷書で表記される。また，小篆で大書される文字が全て見出文字となっているとは限らないし，見出となっている文字が全て論述文中において小篆で大書されるわけでもなく，規則性が見いだせない。

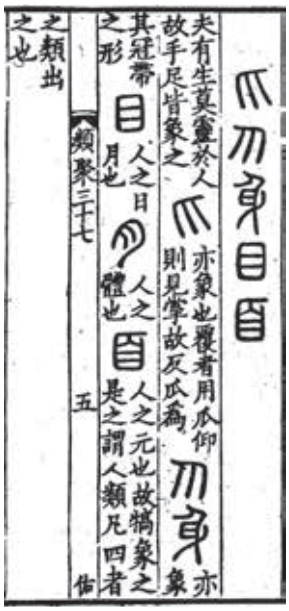
二点目は，各類の最初に挙げられる見出のように大書される文字が，必ずしも一致せず，また挙げられる文字の数及び提示順に異同があることである。

2）巻三十から巻四十までは，趙**宧**光旧蔵のもので，黄丕烈・汪士鐘の手を経たものである。祁嶲藻が校訂を行った際には，このうち巻三十・三一は未見である。

3）『淮南子』「原道訓」に「萬物紛糅、與之轉化（萬物紛糅し、之とともに轉化す）」とある。また『尚書』「**舜**典」に「八音克諧、無相奪倫、神人以和（八音克く諧（かな）い、倫を相い奪うこと無ければ、神人以て和す）」とある。つまり，万物はみだれもつれ合うが，お互いの調和を破るようなことはない，ということだと考えられる。



（図1）



（図2）

例えば「人の類」は，祁刻本では次のようになっている。上述のように，最初の一行は小篆で大書されており，二行目以下は双行の割り注の形式となる。なお，「類聚篇」の引用中，二重下線が附された文字は，小篆で書かれていることを示す。以下同様とする。

手足爪丌身目肉百

夫有生莫靈於人、故手足皆象之、爪亦象也、覆者用爪、仰則見掌、故反爪爲丌、身亦象其冠帶之形、目人之日月也、肉人之體也、百人之元也、故犆象之、是之謂人類、凡四者之類出之也[4)]

（夫れ生有るもの人より靈なるは莫し、故に手足皆な之に象り、爪も亦た象なり、覆う者は爪を用い、仰げば則ち掌を見る、故に反爪を丌と爲す、身も亦た其の冠帶の形に象る、目は人の日月なり、肉は人の體なり、百は人の元なり、故に犆（こと）に之に象る、是れ之れを人の類と謂う、凡そ四者の類之より出づるなり）

四部叢刊本は、表記の形式が異なるほか，一行目に挙げられている文字が大きく異なる。「爪

4）見出として挙げられている文字は，「通釋篇」では以下のようになっている。「手　拳也、象形、凡手之屬皆從手、臣鍇曰、五指之形、𢍏、古文手」（巻二三 手部）、「足　人之足也、在下、從止口、凡足之屬皆從足、臣鍇曰、口象股脛也」（巻四 足部）、「爪　丮也、覆手曰爪、象形、凡爪之屬皆從爪、臣鍇曰、覆手曰爪、謂以予爪爲物爪也」（巻六 爪部）、「丌　亦丮也、從反爪、闕」（巻六 爪部）、「身　躬也、象人之身、從人厂聲、凡身之屬皆從身」（巻十五 身部）、「目　人目也、象形、重童子也、凡目之屬皆從目」（巻七 目部）、「肉　胾肉、象形、凡肉之屬皆從肉、臣鍇曰、肉無可取象、故象其爲胾」（巻八 肉部）、「百　頭也、象形、凡百之屬皆從百、臣鍇曰、厂髮髻也」（巻十七 百部）

不身目百」のみで，「手足」及び「肉」篆は挙げられていない[5]。祁刻本では，最後の「四者」が何を指すのか分からない。四部叢刊本に拠れば，「反爪」の「不」を除いた「爪身目百」の「四者」を指すのであろうことがわかる。

このように，四部叢刊本がなければ，小徐の意図するところが分からない場合もあり，四部叢刊本の方が優れているようにも見える。しかし，双行の論述中，小篆で大書される文字に法則性が見いだせないなど問題も多いことから，やはり祁刻本に基づきつつ，四部叢刊本を適宜参照することにする。

なお，承培元『説文解字繫傳校勘記』は，「類聚篇」については，3点の衍字・誤字・脱字を指摘するのみで，ほとんど言及がない。

では次に，どのように各類が提示・論述されているか見てみよう。「類聚篇」は，まず「数の類」から始まる。

一二三四五六七八九十百千

夫物生而後有象、象而後有滋、滋而後有數、昔伏羲氏繼天而興、爲百代倡、德首於木、天地之始也、帝出于震、萬物之原也、於是始作易、觀龜魚之文、以畫八卦、以類萬物之情、龜象也、筮數也、八卦之畫、書之原也、是以一二三皆數、而畫之也、積多則煩、故自四皆象也、四方之分、故象天地之分、（中略）十則數已終也、四方具焉、百者亦成數也、故從一從白、白詞語也、千者數之彌大可擧也、故從人持十爲千、此數之略也

（夫れ物生じて而る後に象有り、象ありて而る後に滋ゆる有り、滋えて而る後に數有り、昔伏羲氏天を繼ぎて興こり、百代に倡えらる、德は木を首とするは、天地の始めなり、帝は震より出ずるは、萬物の原なり、是に於て始めて易を作る、龜魚の文を觀、以て八卦を畫し、以て萬物の情を類す、龜は象により、筮は數によるなり、八卦の畫は、書の原なり、是を以て一二三は皆數にして、之を畫するなり、積むこと多ければ則ち煩たり、故に四自り皆象るなり、四方の分かるる、故に天地の分かるるに象るなり、（中略）十は則ち數已に終わるなり、四方具われり、百なる者も亦た成數なり、故に一に從い白に從う、白は詞語なり、千なる者は數の彌（いよいよ）大にして擧ぐる可きなり、故に人の十を持するに從うを千と爲す、此れ數の略なり）

各類の最初には，その類全体の説明が付される場合と，冒頭から対象文字についての論述が始まる場合がある。「数の類」は「類聚篇」の最初でもあることから，まず篇全体の序となるような，文字の誕生についての論述から始まる。この部分は多くの典拠を踏まえた記述となっている。以下，下線を附した部分が典拠となっている。

『春秋左氏傳』に「夫韓簡侍曰、龜象也、筮數也、物生而後有象、象而後有滋、滋而後有數」

5）このほかの異同は，見出字以外の「爪」の字が「瓜」となっている点，及び「故犒象之」の「犒」が「犒」となっている点の2点3箇所であるが，ともに祁刻本の方が文意にかなっている。

（僖公十五年 伝）とあり，韓簡の言葉を記している。亀卜は象（かたち）により，筮占は数によって判断する。物事が発生して形ができ，形ができると次第に増え，増えると数ができる，ということである。

また，『易』「說卦傳」に「帝出乎震、齊乎巽（帝は震に出で、巽に齊（ととの）う）」と言い，『漢書』「郊祀志下」にも「劉向父子以爲帝出於震、故包羲氏始受木德、其後以母傳子、終而復始（劉向父子以爲らく帝は震より出づ、故に包羲氏始めて木德を受く、其の後母を以て子に傳へ、終わりて復た始まる）」と言う。五行相生によると，木は火を生じ，火は土を，土は金を，金は水を生じ，また最初に戻る。震は八卦の一つで，木德に配されるものである。帝はその震より出たものであり，故に包羲氏が始めて木德を受けたとする[6)]。なお，伏羲氏は包羲氏・庖犧氏・包犧氏・宓犧氏など多くの表記がある。

その後の部分は，『易』「繫辭下傳」の「古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情（古者包犧氏の天下に王たるや、仰ぎては則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀る、鳥獸の文と地の宜しきを觀、近きは諸を身に取り、遠きは諸を物に取る、是に於て始めて八卦を作り、以て神明の德を通じ、以て萬物の情を類す）」に基づく。これはまた，許慎『說文』「敍」（巻二九）の冒頭，文字の誕生について述べた文の典拠ともなっている[7)]。ここでは，包犧氏が王として君臨していた時，（日月などの）天の象，山沢などの地の手本，鳥獸の（羽や毛の）文様，各地の草木金石などの産物，身体の部分などから祖型を取って，始めて八卦を作り，それにより造化の神の德と通じ合い，万物の実情を類型にして示したことを言う[8)]。このようにしてできた八卦が文字の源で，横に引かれた線の数で「数」を表わし，多すぎると煩雑になるため，「四」からは別の方法で文字が作られるようになったとする。

このように様々な典拠を踏まえつつ，その類全体（ここではもう少し範囲を広げて文字）について簡単に述べて上で，見出として挙げられたものについての論述が続く。この時，説解に基づいた記述になっている場合が多いが，基づかない場合もある。ここで取り上げられている「四」「十」「百」「千」は，「通釋篇」では以下のようになっている。

四　陰數也、象四分之形、凡四之屬皆從四　【巻二八　四部】

十　數之具也、一爲東西、丨爲南北、則四方中央備矣、凡十之屬皆從十　【巻五　十部】

百　十十也、從一白、數十百爲一貫、相章也、臣鍇曰、百亦成數、故云、一貫、以詩言

6）このほか，『太平御覽』（巻七八　皇王部三　太昊庖犧氏）に引用する『皇王世紀』に「太昊帝庖犧氏、風姓也、蛇身人首、有聖德、都陳、作瑟三十六絃、燧人氏沒、庖犧氏代之、繼天而生、首德於木、爲百王先、帝出於震、未有所因、故位在東方、主春、象日之明、是稱太昊」とある。

7）「敍」（巻二九）に「古者庖犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、視鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作易八卦、㠯垂憲象」とある。

8）『易』については，本田済著『易』（上）・（下）（中国古典選１・２　朝日新聞社　昭和53年４月・５月）の記述に基づく。

之爲一章也、會意　【巻七　白部】

千　十百也、從十人聲　【巻五　十部】

小徐は「四自り皆象るなり」と言い，「四」以降の数は，形に象る象形によって作られたとする。「四」は説解の「四分の形に象る」に基づき，四方に分かれる形，天地の分かれる形に象ると述べ，「十」は説解の「四方中央備わる」に拠り，四方具わる形に象るとする。ところが「百」「千」は説解では「從一白」「從十人聲」となっており，それぞれ会意と形声の文字である。「百」については，「類聚篇」でも「從一從白」としているが，「千」については「人の十を持するに從うを千と爲す」としており，説解とは異なる。この「人の十を持す」は，『說文』「敍」に「孔氏古文に合わず、史籀に繆(もと)る」俗な字説の例として挙げられた「斗」の字解[9]と同じである。しかしこの「敍」の部分にも，「通釋篇」の「千」の条にも，小徐は何も注しておらず，その真意はわからない。しかし，「千」が説解で形声とされていることと関係があるのかもしれない。小徐は，六書について述べた際，象形・指事・会意で説明できない場合始めて形声とすると述べており，「通釋篇」でもしばしば説解に対して「疑うらくは聲の字多し」と注し，形声ではなく会意とすべきだとすることがある[10]。ここでは「千」も，形声ではなく象形と会意を兼ねた字と解すべきであるとの考えを示したのかもしれない。なお，「百」について「白は詞語なり」とするのは，「白　此亦自字也、省自者、詞言之气、從鼻出、與口相助（白、此れも亦た自の字なり、自を省する者は、詞言の气、鼻從り出でて口と相い助く）」（巻七 白部）とあるのに拠る。段玉裁は「故に其の字上は自の省に从い、下は口に从」う[11]会意字としている。小徐は「白」篆の注でも「言此自字之省、別爲一體也、凡詞助字皆從此（此の自字の省、別に一體を爲すを言うなり、凡そ詞助の字は皆此に從う）」としており，ここで「白」についてわざわざ注記しているのは，このあとに「詞の類」が続くことと関連があるのかもしれない。

このように見出字のそれぞれについて論述した後，各類は多くの場合，「是之謂某某之類也」「此皆某某之類也」のような言葉で締めくくられる。

三　構成と特徴

それでは次に，「類聚篇」にはどのような類があり，どのような順序で配されているのか，ま

9）原文は以下の通りである。「曰馬頭人爲長、人持十爲斗、蟲者屈中也、廷尉說律至以字斷法、苛人受錢、苛之字止句也（臣鍇曰、言不知而說之也）、若此者甚衆、皆不合孔氏古文、繆於史籀」（巻二九　敍）

10）小徐の六書論については，巻一上部「丄」篆の注，及び「疑義篇」（巻三九）に詳しい。また，次に「声」の字が衍字であるとするものの例を挙げておく。「神　天神引出萬物者也、從示申聲、臣鍇曰、申卽引也、疑多聲字、天主降气以感萬物、故言引出萬物也」（巻一　示部）

11）段注四篇上白部「白」篆の注に、「故其字上从自省、下从口、而讀同自」とある。

た各類にはどのような文字が挙げられているのか見ていこう。全ての類と，それを構成する文字を配列順に表にしたものが，次の（表 1）である。

	見出文字	類
1	一，二，三，四，五，六，七，八，九，十，百，千	数類
2	於，者，尒，只，乃，曰，兮，于，粤，乎，可，曾，弥，矣，知	詞類
3	水，火，金，木，土，米	六府類
4	山，川，厂，广，井，宀	地類
5	日，月，云，雨	天類
6	手，足，爪，**禾**，身，目，肉，**百**	人類
7	鳥，烏，舄，燕，鳳，焉	羽族類
8	龍，魚，龜，它，虹	水族類
9	牛，犬，羊，豕，馬，鴈，鹿，兔，鼠	獣類
10	禾，來，朿，韭，竹，𦥑	禾竹類
11	甲，乙，丙，丁，戊，己，庚，辛，壬，癸	十幹類
12	子，丑，寅，卯，辰，巳，午，未，申，酉（卯），戌，亥	十二支類
13	文	

（表 1）

同類のものを集めてその意味を説くものとしては，『爾雅』がその祖である。郭璞「爾雅序」に「夫爾雅者、所以通詁訓之指歸、敍詩人之興詠、揔絶代之離詞、辯同實而殊號者也（夫れ爾雅なる者は、詁訓の指歸するところを通じ、詩人の興詠を敍し、絶代の離詞を揔べ、實を同しくして號を殊にする者を辯ずる所以なり）」とあるように，『詩』を中心とした経書の語，時代を経て言い方が異なるなどした離詞を訓じたものである。「釋詁，釋言，釋訓，釋親，釋宮，釋器，釋樂，釋天，釋地，釋丘，釋山，釋水，釋草，釋木，釋蟲，釋魚，釋鳥，釋獸，釋畜」の19篇からなる。そのうち「釋詁，釋言，釋訓」は「粤、于、爰は曰なり」・「爰、粤、于、那、都、繇は於なり」（「釋詁」）のように「語」を訓じたもので，「類聚篇」の「詞の類」にあたる。しかし「釋親，釋宮，釋器，釋樂」など人の営みによってもたらされたものを釈した類は，「類聚篇」にはない。逆に「1 数類，3 六府類，6 人類，11 十幹類，12 十二支類」[12]に当たる分類は『爾雅』にはない。また，分類方法も『爾雅』の方がより詳細で，同類のものを集めて釈すという点では『爾雅』が念頭にあったかもしれないが，「類聚篇」の「類」が基づいたものとは考えにくい。

ここで，「類聚篇」の冒頭の文及び『說文』「敍」の冒頭部分の典拠となっていた『易』「繫辭下傳」の文をもう一度見てみよう。「古者包犧氏の天下に王たるや、仰ぎては則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀る、鳥獸の文と地の宜しきを觀、近きは諸を身に取り、遠きは諸を物に取る、是に於て始めて八卦を作り、以て神明の德を通じ、以て萬物の情を類す」（11頁の再掲）

12）各類の最初に附した数字は，類の配列順を表わす。

とある。ここでは文字が作られる本となったものが挙げられていると考えられる。それは（日月などの）天の象，山沢などの地の手本，鳥獣の（羽や毛の）文様，各地の草木鳥獣魚金石などの産物，身体の部分などである。

この緩やかな分類は，「4 地類」以下「10 禾竹類」までの各類の傾向と一致するところが多いように思われる。分類の基準は，その記述する対象と目的によって異なる。このことは，「類聚篇」の記述の目的が，文字生成の由来するところと関わりがあることを示唆しているのではないだろうか。

そうであると仮定して，それ以外の類がたてられた目的は何であろうか。もう一度全ての類と，それを構成する文字の配列を順にまとめた（表 1）を見てみよう。

ここで特徴的なことは，「数の類」に始まり，「十干の類」「十二支の類」で終わっていることである。これは，『說文』540 部が「一」に始まり「亥」で終わることを想起させる。そのために意図的に最初に「数の類」をたて，「十干の類」「十二支の類」を最後に配したのではないだろうか。

許慎は，その部の構成・配列について，次のように述べている。

> 其建首也、立一爲耑、方㠯類聚、物以羣分、同條牽屬、共理相貫、雜而不越、據形聯系、引而申之、㠯究萬原、畢終於亥、知化窮冥　【巻三十　後敍】
>
> （其れ首を建つるや、一を立て耑と爲し、方は類を㠯て聚まり、物は羣を以て分れ、同條牽屬し、共理相い貫く、雜して越えず、形に據りて聯系す、引きて之を申べ、㠯て萬原を究む、畢（つい）に亥に終わり、化を知り冥を窮む）

小徐はこの「知化窮冥」[13]に注して，「臣鍇謂、亥生子、終則復始、故託於一、寄終於亥、亥則物之該盡、故曰窮冥也（臣鍇謂えらく、亥は子を生む、終われば則ち復た始まる、故に一に託し、終を亥に寄す、亥は則ち物の該（ことごと）く盡（つ）く、故に冥を窮むと曰うなり）」と言う。

また，「亥」の古文に，次のように述べる。

> 𠥓　古文亥、亥爲豕、與豕同意、亥生子、復從一起、臣鍇曰、家語子夏云、三豕渡河、亥誤爲豕、當爲此𠥓字也、亥豕也、二二辰終也、故同意、天道終則復始、故亥生子、子生丑、復始於一也、易窮則變、變則通、通則久之義也
>
> 【巻二八　亥部「亥」古文】[14]

13）これは段注（十五篇下 後敍）によれば，『易』「繫辭下傳」の「過此以往、未之或知也、窮神知化、德之盛也」（此を過ぎて以往は、未だ之を知る或（あ）らざるなり、神を窮め化を知るは、德の盛んなるなり）に基づいている。注 8）所掲の書の（下）322 頁によると，以下のような意味になる。ただこれより以上の段階となると，極致の世界に入（つ）るので常人には知ることができない，現象の奥にある神の作用を窮め，変化の道を知るというのは，それこそ德を崇（つい）めた極致，聖人の域に達して始めて可能となろう。

14）段注（十四篇下 亥部・「亥」古文）は，「𠥓　古文亥、亥爲豕、與豕同、亥而生子、復從一起」に作り，その注には

許慎は「亥は子を生み、復た一從り起く」と言い，小徐は注して「天道終れば則ち復た始まる、故に亥は子を生み、子は丑を生み、復た一より始まるなり、易窮まれば則ち變じ、變ずれば則ち通ず、通ずれば則ち久しきの義なり」と言う。すなわち「一」に始まり「亥」に終わる部の配列は，終わればまた最初に戻るという永遠の循環を表わしていると考えられる。そして，「類聚篇」も「数の類」の「一」から始まり「十二支の類」の「亥」で終えることで，『說文』の終わればまた最初に戻るという循環を反映していると考えられる。

しかし，「類聚篇」には，「十二支の類」の「亥」の後，最後に「文」が単独で置かれている。なぜ許慎と同じく「亥」で終えなかったのか，またなぜ「文」だけは他と類することなく単独で置かれているのかという疑問が生じる。

では，「文」とは何であろうか。

許慎はその『說文』「敍」で，次のように述べている。

> 蒼頡之初作書、蓋依類象形、故謂之文、其後形聲相益、卽謂之字、字者孳乳而寖多也[15]
> 【巻二九　敍】
> （蒼頡の初めて書を作るや、蓋し類に依り形に象る、故に之を文と謂う、其の後形聲相い益す、卽ち之を字と謂う、字なる者は孳乳して寖（ようや）く多きなり）

さまざまなものの形に象ってできたものが「文」で，それらを組み合わせてできたものが「字」である。また，その文字について，

> 蓋文字者、經藝之本、王政之始、前人所以垂後、後人所以識古、故曰、本立而道生、知天下之至賾、而不可亂也　【巻二九　敍】
> （蓋し文字なる者は、經藝の本、王政の始、前人の後に垂る所以、後人の古（いにしえ）を識る所以、故に曰く、本立ちて道生ず、天下の至賾（しさく）を知れども、亂るべからざるなり）

「故曰」以下は，『論語』「學而」篇に「君子務本、本立而道生（君子は本を務む、本立ちて道生ず）」とあり，『易』「繫辭上傳」に「言天下之至賾、而不可惡也、言天下之至動、而不可亂也（天下の至賾を言えども、惡（にく）むべからざるなり、天下の至動を言えども、亂るべからざるなり）」とあるのに拠る。文字は（経書の）学問の根本であり，王の政治の基礎であり，前代の人が後世に伝え，後世の人が古い時代のことを知る本となるものである。そこで，根本が確立してこそ道理が生じ，天下の最もわかりにくい道理を知っても混乱することはない，と言う。このように，許慎は文

「此言始一終亥、亥終則復始一也、一下以韵語起、此以韵語終」と言う。

15）段玉裁によると，「文」は象形と指事であり，「字」は会意と形声である。また「卽謂之字」の後に，「文者物象之本」の６字が脱誤しているとして，この６字を補っている。（十五篇上　敍）

字を学問・政治の根本と捉えていた故に，「文を説き字を解す」る『説文解字』を著したのであろう。これを受け小徐も，「文字者、聖人之所以極深而研幾也（文字なる者は、聖人の深を極め幾を研むる所以なり）」（巻四十 系述）と述べている。また，「類聚篇」では「文」について，以下のように述べている。

天地絪縕、萬物化生、天感而下、地感而上、陰陽交泰、萬物咸亨、陽以經之、陰以緯之、天地經之、人實緯之、故曰經天緯地之謂文
（天地絪縕（いんうん）として、萬物化生す、天は感じて下り、地は感じて上る、陰陽交泰し、萬物咸な亨る、陽以て之を經し、陰以て之を緯す、天地之を經し、人實之を緯す、故に曰く、天を經し地を緯すの謂は文なり）

『易』「繫辭下傳」に「天地絪縕、萬物化醇、男女構精、萬物化生（天地絪縕（いんうん）として、萬物化醇（かじゅん）す、男女精を構（あ）わせて、萬物化生す）」とある。また，『春秋左氏傳』昭公二八年の伝に「擇善而從之曰比、經緯天地曰文（善を擇びて之に從うを比と曰う、天地を經緯するを文と曰う）」とあり，その杜注に「經緯相錯、故織成文」と言う。縦線と横線が錯綜することで文（あや）なすことから「文」というのである。

ここでもやはり，「文」を天地を治め調えるものとする。これはまた「文」が「畫也、象交文」（巻十七 文部）とあるように，交錯する形に象ることから，経緯（縦線と横線）が錯綜する形に由来するものでもある。

『説文』は文字の意味を説くものである。中でも「文」は象形により生まれた文字の最初の形であり，そうして生まれた文字は学問・政治の根本でもある。そのように重要な「文」であるから，ほかとは区別して最後に単独で配したのではないだろうか。

では，「詞の類」と「六府の類」はどうであろうか。まず，「六府の類」の冒頭と結びの部分を見てみよう。なお，六府とは，水火金木土（五行）と穀物を指す。

此六府也、昔伏羲之卦、文之初也、蒼頡沮誦知結繩之不可以久也、仰觀俯察、始爲文、蓋皆象形、此六者是也、五行者、天之五佐、德之大者也、故皆象之、米人所以生也、禾則穀也、朮者麻之類也、人所以衣也、故專象之（略）
此六者、有形之主、而六者之孳益、不可勝載也、後之賢者、隨義而益之、故有字、凡物之大者、略已象之爲文矣、後之字、皆孳合而爲之、亦不能及遠故也、是之謂六府之類也

これは六府である。昔伏羲氏の作った八卦は文の初めであった。蒼頡・沮誦は結繩が長くは続かないことを知り，上は見ては天を，下を向いては地を観察し，始めて文を作った。思うにみな象形であった。この六者（六府を指す）はこれに当たる。

この部分は「類聚篇」の冒頭と同じく，やはり『說文』「敍」の冒頭「古者庖犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、視鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作易八卦、㠯垂憲象、及神農氏結繩爲治而統其事、庶業其繁、飭僞萌生、黄帝之史蒼頡、見鳥獸蹏迒之迹、知分理之可相別異也、初造書契（古者庖犧氏の天下に王たるや、仰ぎては則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀る、鳥獸の文と地の宜しきを視、近きは諸を身に取り、遠きは諸を物に取る、是に於て始めて易の八卦を作り、㠯て憲象を垂る、神農氏の結繩して治を爲し而して其の事を統ぶるに及んで、庶業其れ繁げく、飭僞萌生す、黄帝の史蒼頡、鳥獸蹏迒の迹を見て、分理の相い別異す可きを知るや、初めて書契を造る）」（巻二九）を踏まえている。

五行とは，天を助け，徳の大きなものであるから，その形に象る。米は人の生きる糧であり，禾は穀類，朮は麻の類いで衣服の本になるため，その形に象る，と言う。

また，結びの部分では，次のように述べる。この六者は形あるものの主であり，それから孳益するものは枚挙に暇がない。後の賢者が意味により更に増やして字ができた。おおもとの物は形に象って文を作る。後の字は皆それを組み合わせて作るため，遠くまで及ぶことはできない。

ここで注目すべきは，最後の文である。本となる「文」と，後に作られた「字」とは，文字としての力にも差があると考えている。このことが「類聚篇」を読み解く鍵になると考えられる。また小徐は，この六府の文字は，文字が最初にできた時に生まれたものの一つであると考えた故に，「六府の類」をたてたと考えても良いのではないだろうか。

次に，「詞の類」を見てみよう。

「右皆詞也、詞者語之助也」から始まる。「詞」とは「語の助」，所謂「虚字」である[16]。この類は，ほかの類と異なり，用例を挙げながら論を進める場合が多い。また，虚字であり，具体的・実在的な意味を持たないため，発音する際の息の流れなどにより説かれることが多い。「者」「尒（爾）」を例として見てみよう。

> 白者、詞言之气、從鼻出、與口相助、故象口之氣左右出而上合也、者也者、亦辭之助、故從之　【巻三七　類聚】
>
> 白　此亦自字也、省自者、詞言之气、從鼻出、與口相助、凡白之屬皆從白、臣鍇曰、言此自字之省、別爲一體也、凡詞助字皆從此　【巻七　白部】
>
> 者　別事詞也、從白**㫃**聲、**㫃**古文旅、臣鍇曰、凡文有者字者、所以爲分別隔異也　【巻七　白部】

「者」は虚字であるから，「白」を構成要素とする。その「白」は，「自」の字の異体字であ

16）「詞」の類についての説明では，「語之助」「辭之助」「言之助」などさまざまに表現されるが，以降統一して「虚字」とする。

り，鼻のことである。そのことから，息が鼻から出て口と助け合いながら発音されるため，息が左右に出て上で一つに合わさる形に象って文字ができたとする。

> 尒者、詞之必然、猶云如此也、若禮曰、鼎鼎尒、猶猶尒、在句之下、故象入而丨左右分、今試言尒、則口气直出旁四散而盡也　【巻三七　類聚】
>
> 尒　辭之必然也、從入丨八、八象气之分散、臣鍇曰、爾詞者、言之助也、禮曰、鼎鼎爾、悠悠爾、是必然、凡今試言爾、則敷上脣收下脣、气向下而分散也、指事　【巻三　八部】
>
> 故騷騷爾則野（謂大疾）[17]、鼎鼎爾則小人（謂大舒）、君子蓋猶猶爾（疾舒之中）　【禮記　檀弓上】

「尒」は，然（しか）りという意味の語であると説明した上で，『禮記』「檀弓上」の「鼎鼎爾たれば則ち小人，君子は蓋し猶猶爾たり」を例として，「尒（爾）」は句の下に来ることから，口気が下向きに出て左右に分散してつきる形に象って文字ができたとする。「尒」（巻三）の注には，さらに「指事」であると言う。指事について，小徐は次のように述べている。

> 凡指事象形義一也、物之實形有可象者則爲象形、山川之類、皆是物也、指事者、謂物事之虛無不可圖畫、謂之指事、形則有形可象、事則有事可指、故上下之義、無形可象、故以丄丅指事之、有事可指也　【巻一　丄部「丄」篆注】
>
> （凡そ指事・象形の義は一なり、物の實形の象る可き者有れば則ち象形爲り、山川の類は皆是の物なり、指事なる者は、物事の虛無にして圖畫す可からざるを謂い、之を指事と謂う、形あれば則ち形の象る可き有り、事あれば則ち事の指す可き有り、故に上下の義は、形の象る可き無し、故に丄丅を以て之を指事す、事の指す可き有るなり）

虛字の類いには，象るべき形がない。そのため実体のない口気の流れを指し示すことで文字にするのである。それ故，「詞の類」の最後に「凡此數者、皆虛也、無形可象、故擬其口气之出入、舒疾、高下、聚散、以爲之制也（凡そ此の數者は、皆虛なり、形の象す可き無し、故に其の口气の出入、舒疾、高下、聚散に擬し、以て之が制と爲すなり）」と述べる。象形の手法を取れない事柄は，指事の手法で文字を作る。それらの文字を集めてまとめたのが，「詞の類」である。「詞の類」がほかと異なるように感じられたのは，象るものの実体がない，「事」に象ったものであったからであろう。

同じ虛字の類いでも，「其」「夫」「焉」「耳」などは，この類に入らない。それは，それぞれ

17）括弧内は，鄭玄の注である。

「箕」「民夫」「鳥の名」「人体の一部」という実体を兼ね備えており，指事によって作られた文字とは異なるからである[18]。

「類聚篇」では，その文字の成り立ち，特にその文字が何に象って作られたかを説くことに重点があるように見える。小徐はまた，六書について論じる中で，象形について次のように述べている。

> 六文之中、象形者、蒼頡本所起、觀察天地萬物之形、謂之文、故文少、後相配合孳益爲字、則形聲會意者是也　【巻一　丄部「丄」篆注】
>
> （六文の中、象形なる者は、蒼頡の本（もと）づきて起つ所、天地萬物の形を觀察し、之を文と謂う、故に文少なし、後に相い配合し孳益して字を爲る、則ち形聲會意なる者は是れなり）

まず最初に生まれたのが象形の文字であり，それはさまざまに変化し，またほかの文字を作り出すなど，文字としての能力も大きい。「類聚篇」はそのような最初に生まれ，ほかの文字を生み出す本となったと考えられる文字を集め，同類のものごとにその成り立ちを説いたものと考えられる。また文字が永きにわたり生成されていくことを，『說文』の部首と同じ「始一終亥」の配列にすることにより表わしたのではないだろうか。

それでは，もう少し，『說文』の中の象形について見ておこう。

小徐本「通釋篇」のうち，説解及び小徐注の中で，「象」[19]の字が用いられている条を抽出すると，385条ある。これらを，「類聚篇」で見出字となっているもの83条と，それ以外の302条に分け，それぞれを，1) 象形，2) 象形と他の構成要素を組み合わせたもの，3) 説解ではなく注で象形とするもの，4) 或体が象形であるものに分類した。また，「類聚篇」で見出字となっているもののうち，17字は説解及び小徐注の中に「象」字が用いられていないので，象形以外として分析に加える。次にそれぞれの例を挙げておく。該当箇所に下線を附した。

> 八　別也、<u>象分別相背之形</u>、凡八之屬皆從八、臣鍇曰、數之八、兩兩相偶背之、是別也　【巻三　八部】
>
> 木　冒也、冒地而生、東方之行、<u>從屮、下象其根</u>、凡木之屬皆從木、臣鍇曰、木之於屮彌高大、故從屮下有根、屮者木始甲坼也（略）【巻十一　木部】
>
> 六　易之數、陰變於六、正於八、從入八、凡六之屬皆從六、臣鍇曰、<u>亼象一變二也</u>　【巻二八　六部】

18）原文は以下の通り。「若夫<u>其</u>、緩詞而象於箕、<u>云</u>發語而本於气、<u>夫</u>（音扶）爲民夫之借、<u>焉</u>有烏鳥之名、<u>耳</u>同人體、<u>爲</u>兼禺屬、<u>何</u>爲負儋、<u>斯</u>則析薪、<u>已</u>爲薏、以<u>已</u>爲蛇已、若此類皆兼實名、則取象自別也」（巻三七　類聚）

19）但し，声符などの構成要素となっているものなどを除き，「かたどる」意で用いられているものに限る。なお，語意の微妙な違いによる混乱を避けるため，文字を構成する各部分を表す場合，「偏旁」ではなく「構成要素」という語を用いる。

日　實也、太陽之精不虧、從囗一、凡日之屬皆從日、臣鍇曰、通論備矣、

𠙵　古文象形　【巻十三　日部】

「八」篆は「分別相い背くの形に象る」とあり，象形である。「木」篆は「屮に從い、下は其の根に象る」と言い，一部象形である。「六」篆は説解の「入八に從う」に対する注に，「亼は一の二に變ずるに象るなり」と言う。「日」篆はその古文に「象形」という。象形以外のものは，例えば，「数の類」の「千」（第12頁参照）などがそれである。

これら「類聚篇」で見出字となっている100条と，それ以外のもの（表では，「その他」とする）302条中部首字となっているもの211条についてまとめたものが，（表2）である。

	「類聚篇」	100	その他　302
	部首	他	部首
象形	48	2	133
象形＋他	25	2	75
注	4	0	3
或体	1	1	0
象形以外	7	10	0
計	85	15	211

（表2）

なお，「類聚篇」で見出となっている以外の302条中，部首字以外の91条については省略した。

象形もしくは一部象形のものは，部首字に多い。「その他」では，全302条中211条，約70%であるが，「類聚篇」では全83条中78条，約94%となっている。このことは，「類聚篇」には，象形もしくは一部象形の文字のうち，部首字であるものが意図的に選ばれていることを示している。また，「類聚篇」に取り上げられた文字のうち，象形以外の17字は，「数の類」に5文字，「詞の類」に7文字と，この2類に集中している[20]。この2類と「十干の類」・「十二支の類」は，属する文字が決まっており，象形のもののみを選ぶことができなかったためであろう。

このように，「類聚篇」に取り上げられている文字は，基本的にはその類の造字の本となるような，部首字である象形の文字を集めたと言えよう。

ところで，「類聚篇」の記述を見ていると，「通釋篇」とは異なり，典拠を明示しない引用が多いことに気づく。次の（表3）は，「類聚篇」の中で典拠のある語句の出典を示したものである。それぞれ典拠を明示するものと明示しないもの，引用箇所が総論にあるのか個別の文字の説明部分にあるのかに分けて示している。典拠が示されていないものが多いので，見落としがある可能性は大きいが，概要は示すことができると考えている。表中の『禮』は，『周禮』『儀

20）そのほか，「十二支の類」に2文字，「地の類」・「人の類」・「水族の類」各1文字である。

禮』『禮記』の３礼を，『春秋』は『春秋左氏傳』『春秋公羊傳』『春秋穀梁傳』の３伝をまとめたものである。また，空欄は該当するものがないことを示す。

	引用総数	出典を明示するもの		出典が示されないもの	
		総論	個別	総論	個別
易	8			5 (**5**)	3 (**3**)
書	10		8 (**1**)		2 (0)
詩	12	2 (0)	6 (**1**)		4 (0)
禮	5		1 (0)	1 (0)	3 (**3**)
春秋	9	1 (0)	4 (0)	3 (**2**)	1 (**1**)
論語	3	2 (0)	1 (0)		
老子	1			1 (**1**)	
莊子	2				2 (**2**)
漢書	2			2 (**2**)	
その他	5	1 (1)	1 (0)	1 (**1**)	2 (0)

（表３）

なお，括弧内の数字は，それぞれ「詞の類」以外の類に属するものの数を示したものである。「詞の類」は，ほかの類とは異なり，「尒」の例（第18頁参照）や，次の例のように，その用例を示しながら論じることが多く，その際にはやはり典拠が明示されることが多い。

> 春秋曰、於越入呉、詩曰、瞽不畏明、皆語之先也、語曰、於從政乎何有、騷曰、山中人兮芳杜若、此皆气之轉也、詩曰、母也天只、不諒人只、語曰、吾無隱乎爾、此皆語之餘也　【巻三七　類聚】

ここでは，まず『春秋左氏傳』定公五年の経の「於越入呉（於越 呉に入る）」，及び『毛詩』大雅「民勞」の「式遏寇虐、憯不畏明（式(もっ)て寇虐(こうぎゃく)し、憯(かつ)て明を畏れざるを遏(や)めよ）」を引用して，ここで用いられている「於」・「憯」は「語の先」であるとする。『春秋左氏傳』の杜預の注にも「於、發聲也（於は發聲なり）」と言うように，これらは発語の助字である。次に『論語』「雍也篇」の「子曰、由也果、於從政乎何有（子曰く、由や果、政に従うに於てか何か有らん）」，及び「九歌・山鬼」の「山中人兮芳杜若（山中の人　杜若を芳(かお)らす）」（『文選』巻三三）を引用して，この「乎」・「兮」は「气の轉」であると言う。最後に『毛詩』鄘風「柏舟」の「母也天只、不諒人只（母や天、人を諒(まこと)とせず）」，及び『論語』「述而篇」の「子曰、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾（子曰く、二三子 我を以て隱せりと爲すか、吾れ隱す無きのみ）」を引用して，「只」・「爾」は「語の餘」であるとする。

ここは，「詞の類」の総論に当たる部分であり，虚字には，文頭・語頭に用いられるもの，句中に用いられるもの，文末・句末に用いられるものがあることを説いている。

このように「詞の類」では，基本的にそれぞれの虚字の用例としての引用となっている。これらは，「通釋篇」で，説解に注をつける場合と同じであるため，「類聚篇」の記述の特徴とはならない。そこでこれらを除いて考えると ―― つまり，（表3）の括弧内の数字に注目して考えると ――『易』の使われ方が，ほかとはかなり違っていることに気づく。

では，『易』は，どのように典拠として用いられているのであろうか。

『易』は，一つの文字を説く際にも用いられているが，各類の冒頭や結びなど，総論的な部分にも用いられている。「水族の類」の「亀」の条では，

> 龜蟲之異也、天生神物、聖人用之、故象其外骨之形　【巻三七　類聚】
>
> （龜は蟲の異なるものなり、天は神物を生ず、聖人之を用う、故に其の外骨の形に象る）
>
> 龜　舊也、外骨內肉者也、從它、龜頭與它頭同、天地之性、廣肩無雄、龜鼈之類、以它爲雄、象足甲尾之形、凡龜之屬皆從龜、居追切　【巻二五　龜部】[21]
>
> 是故天生神物、聖人則之、天地變化、聖人效之、天垂象見吉凶、聖人象之
>
> 【周易　繫辭上傳】
>
> （是の故に天神物を生ず、聖人之に則る、天地變化す、聖人之に效う、天象を垂れて吉凶を見す、聖人之に象る）

説解に「天地の性」とあることを踏まえ，「繫辭傳」の天が亀甲などの神秘的予知能力のある物を生み，聖人は此を法則として用いた[22]という記述を典拠として用いている。これは，象形の文字ではあるものの，造字能力の高くない「龜」を水族として取り上げた理由ともなっているのではないだろうか。このほか，「地の類」の「井」「厂」の条にも『易』を典拠とする記述がある。

次に，総論的な部分に用いられているものを見てみよう。『易』を典拠として用いているのは，「数の類」の冒頭，「天の類」の冒頭，及び最後の「文」の条である。

> 夫物生而後有象、象而後有滋、滋而後有數、昔伏羲氏繼天而興、爲百代倡、德首於木、天地之始也、帝出于震、萬物之原也、於是始作易、觀龜魚之文、以畫八卦、以類萬物之情、龜象也、筮數也、八卦之畫、書之原也　【類聚　數類】
>
> 夫仰則觀象於天、日月是已　【類聚　天類】
>
> 天地絪縕、萬物化生、天感而下、地感而上、陰陽交泰、萬物咸亨、陽以經之、陰以緯之、天地經之、人實緯之、故曰經天緯地之謂文　【類聚　文】

21）小徐本は，巻二五が欠巻となっており，大徐本で補われている。そのことは，反切が「居追切」と「反」ではなく「切」となっていることにも表れている。

22）注8）所掲の書の（下）299頁に拠る。

このように，主に総論的な文の典拠として用いられているものはほかにはない。これらの条については，第11頁及び第16頁で詳述したので，ここでは簡単に述べる。「数の類」の「帝出于震」は，「說卦傳」に基づき，「於是始作易、觀龜魚之文、以畫八卦、以類萬物之情」及び「天の類」の「夫仰則觀象於天」は，「繫辭下傳」の「古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情」を典拠としている。「文」の「天地絪縕、萬物化生」は，やはり「繫辭下傳」の「天地絪縕、萬物化醇、男女構精、萬物化生」に拠っている。特に「数の類」の冒頭と「文」の条は，「類聚篇」の序と結びとも言える部分である。ここにそれぞれ『易』に典拠を持つ文が用いられていることは，「類聚篇」における『易』の重要性を表わしているのではないだろうか。

そもそも「類聚篇」の名は，『易』「繫辭上傳」の冒頭の文から取ったものと考えられる。

> 天尊地卑、乾坤定矣、卑高以陳、貴賤位矣、動靜有常、剛柔斷矣、方以類聚、物以羣分、吉凶生矣、在天成象、在地成形、變化見矣　【易　繫辭上】
>
> （天は尊く地は卑しくして、乾坤定まる、卑高以て陳なりて、貴賤位す、動靜常有りて、剛柔斷(さだ)まる、方は類を以て聚まり、物は羣を以て分れて、吉凶生ず、天に在りては象を成し、地に在りては形を成して、變化見わる）

本田氏[23]によって，その大意を述べると，次のようになる。天は上にあって尊いのに対して，地はその地位は天よりは卑しい。（天地の位に照応して）乾と坤の卦が定まった。万物が序列をなしているのに象って，易の卦の六爻の位が定められた。（陽は動，陰は静と）陰陽の動静に恒常性があるのに応じて，剛爻と柔爻とが判然と分かたれた。善い方向に向かうものは，善いもの同士集まり，悪い方向に向かうものは，悪いもので集まる。善いものばかり，悪いものばかり，それぞれ群をなして分かれる。（そのように物の善し悪しには，同類がついてまわるので，）易の卦に吉と凶の別途の占断が生じたのである。陰陽は互いにからみ合って，天にあっては日月星といった象(かたち)を形成し，地にあっては山川や動植物といった形を形成する。こうした物を作る陰陽の気の変化に象って，易の卦爻の変化（陰爻が陽爻に，陽爻が陰爻に変ずるという）の作用が現われたのである。この「方は類を以て聚まる」から，「類聚篇」という名が生まれたと考えても良いであろう。

この部分はまた，許慎「後敍」のうち部の構成・配列を述べた部分の典拠ともなっている。許慎「後敍」には「其建首也、立一爲耑、方㠯類聚、物以羣分、同條牽屬、共理相貫、雜而不越、據形聯系、引而申之、㠯究萬原、畢終於亥、知化窮冥（其れ首を建つるや、一を立て耑と爲し、方は類を㠯て聚まり、物は羣を以て分れ、同條牽屬し、共理相い貫く、雜して越えず、形に據りて聯系す、

23）注8）所掲の書の（下）257頁から258頁参照。

引きて之を申べ、目て萬原を究む、畢(つい)に亥に終わり、化を知り冥を窮む)」(巻三十 後敍)とあり，下線を付した部分が「繫辭上傳」を典拠としている。このことも，篇名の由来が『易』「繫辭傳」のこの部分であることの傍証となろう。

『說文』の部の配列は，その「後敍」に「形に據りて聯系す」と言うように，基本的には形の類似に拠っている。それ故，部単位で考える時，同類のものが類を成すということを表わすことができない。「類聚篇」は，まずそれを補うものであると言えよう。また，その類の配列は，許慎『說文』と同じ「一に始まり亥に終わる」という循環を表わすものとなっている。

また，最後に「文」篆を単独で配したことには，『說文』という書にとって，「文」が特別な意味を持っている ——「文」とはさまざまな形に象って作られ，それを組み合わせてさらに多くの文字を生み出す本となったものであり，そうして生み出された文字は，学問・政治の根本である[24] —— と，小徐が考えたからではないだろうか。

「類聚篇」は，造字の本となった象形の文字が，自然と類を以て聚まったものを「類」とし，それを「始一終亥」という『說文』の循環を表わす部の配列に則って配したものと言えよう。また，「類聚篇」にも「部敍篇」[25]と同じく，『易』の影響が色濃く出ていることは，注目すべきであろう。

24）許慎「敍」(巻二九）に基づく。第15頁の引用以下の記述を参照。

25）拙著「『說文解字繫傳』「部敍篇」考」(『言語文化研究』45号（大阪大学　2019年3月）参照。